

すっかり変貌した街

―そして、そこで見たものは…

竹田由彦（直江津河原町出身）

真夏の強い日差しも幾らか和らぎかけ、初秋の気配すら感じさせられる残暑の頃だったと思う。いつものように私のパターン化した一日が始まる。遅い昼食を済ませ、薄暗い仕事部屋にある古びた藤椅子に深々と体を沈め、あれこれと思い巡らす、といった時を過ごしていた。そうこうしている内に夕方近くになり、食材の買出しにでも、と思った矢先に電話が鳴った。また「財テクのお勧めとか」「霊園墓地のご案内」なんかだろうと思い無難作に受話器を取った。

「直江津高等学校の若山ですが」と言う受話器からの意外な声であった。咄嗟に「私は直江津高校の同窓生ですが」と言つたように覚えている。「同窓会費なら払っています」と言おうとした途端、「この度、直江津高校が中高一貫校のシステムに変わるので、新しい校歌の作曲をお願い

したい」とのことであった。「それは大変光栄なことでもあり、喜んで引き受けさせて頂きます」と即座に答えたことを覚えていた。

その後の打合せで、作詞は大岡信先生にお願いすることになり、私は校歌作曲の下見を兼ねて、十月中旬頃に学校に伺うことになった。暫くは遠出をしているので、列車時刻表を見ながらのスケジュールの調整は久しぶりであった。上越新幹線経由はよく線で行くことに決め、午前中に着くように手配し、座席の確保を考慮し、予定通り東京駅から発つことにした。

最近の直江津駅周辺はすっかり様変わりしたことは噂で聞かされていたし、白く細長いドーム型の外景も写真で見たこ

とがあったので、だいたいの様子は想像できた。

汽車は越後湯沢を過ぎ、何となく時を過すうちに直江津駅構内に入り、やがて静かに停止した。

漸く来たなあ、という妙な実感が込み上げてきて、下車して暫くはホームを見入った。

あの頃と同じなんだろうか、それとも改修されたのだろうか。階段を登り、改札口で若山校長先生の出迎えを受け、初対面の挨拶を交しながら構内を抜け、駐車場のある方の階段を降りた。

そこで目にしたものにはあの頃の面影は何処にもなく、すっかり様変わりした光景だけであり、方位錯誤に陥ってしまった程であった。

若山先生の車に同乗させてもらい、近くにある高校に向かった。風が吹けば砂埃が舞い立った小石混じりの坂道は舗装され、正面玄関の位置も変わり、思い出の中にある古びた木造校舎とは打って変り、丸ごと建て替えられてしまっていた。改築はいつ頃だったんだろうか。アカシヤの樹が植えられていた所は何処なんだろうか。ふとそんな思いが頭の中を掠めていった。

校内に案内され、周りの方々への挨拶を済ませ、教室での授業風景を拝見させてもらい、見晴らしの良い屋上に案内された。

遙か向こうに妙高山が見え、反対側には米山が霞んで見えた。日本海が直ぐ近くに見えるのは気の所為だろうか。波打ち際までの砂場が広がったように記憶しているのだが、屋上を降り再び校内に戻り、廊下を歩いている途中、何故か物足りない寂しさのようなものが込み上げてきたのは何故だろうか。

やはりアカシヤの樹がないことに気付いた。校舎改築の際に除去されたことは事前に聞いてはいたのだが。思い出のページが剥ぎ取られてしまったような心境になつてしまった。

校舎の一隅にあった音楽室の窓から見えたアカシヤの樹々は、毎年六月から七月にかけ、爽やかな日差しに照らされた葉が重なり合い、そよ風に揺れ、やがて咲く白い花が初夏の到来を告げる。「あゝ綺麗だなあ」とつくづく感じたのは今でも



記憶に新しい。

今、タイムスリップして同じ光景を目にしたとしても、恐らくなんの変哲もない一つの点景にしか見えないかも知れないが、四季の移り変わりの中では最も印象に残る風趣だったように思えてならない。私と同じ世代の卒業生の中には、同じ体験を持っている人が少なからずいるように思えてならない。今でも存続している生徒会誌「アカシア」がこの事を物語っていると思う。私の中では、遥かなる記憶が目蓋に焼き付いていて離れない。そして、惜別の情がいつまでも尾を引くことになるような気がしてならない。

校長室で昼食をご馳走になり、暫くして生前近所に住んでおられた恩師中井ツノ先生の自宅に伺い、御霊前に手を合わせた後、ご息息の中井良海先生の自家用車に同乗させてもらい、学校と駅周辺の主な所を案内していただいた。

ゆつくりと走る車の窓から目にしたものは、想像していたことよりも遙かに懸離れた外景であった。道路はすっかり整備され、東京の郊外でも見受けられるような都市計画プロジェクトに基づいた街造りの構図が目に入ってきた。平日の午後ということもあり人影はなく、遠くに見える舗道を時折車が横切るといった程度。見慣れた看板が一つ、そして二つ、ここにも少子化の傾向が波及しているのだ

ろうか。活気らしいものは何一つ感じ取れず、騒音の少ない街の佇まいが、あの頃の様相に反して違和感すら感じられ、暫くは唖然としたまま意欲しに通り過ぎる光景を目にすることになった。

室生犀星の「ふるさは遠き」にありて思ふもの」という詩文を連想させる風景は何処にも見当たらなかった。

人は何処にいたのだろうか。ひよつとすると、いずれは過疎の街になりはしないか、という心配が脳裏を過ぎる。

何を目指し何処へ行くかとしているのだろうか。この変わり様と裏腹に複雑な思いが込み上げてきた。

多分、次世代へ引継ぐお土産さんだろう。そう思った途端、私はほつとして安堵の気持になり、思わず拍手を送りたい心境にすらなった。

向うに上越文化会館が見える舗道を車はゆつくりと進み、ほとんど会話のないまま、次の場所に向った。「私のかへって行く故里が、どこかにとくあるやうだ」いつか読んだ立原道造の詩の一文が思い浮かび、変に取り留めのない心境に浸らされることになったしまった。

人が住み、そして、そこの生活があれば、状況に適合した変革はむしろ必然的なこと。ここでもその一端を垣間見るこ

とができた。すっかり変貌してしまい、付近全体は街の体裁が整えられている。旧直江津町付近のみを車で意欲しに覗き見ただけで上越市全体の様相を見立てることは出来ないのだが、何かに押し切られ、無理やりに変貌させられてしまった街、というイメージは否めなかった。だがその反面、何かを変えたい、変わりたいという願望も痛いほど感じ取られた。こう思うのは私だけだろうか。

荒川と保倉川の橋を渡り、決て車を止め二人は降りてみた。見覚えのある懐かしい場所である。高校まで住んでいた家が近くにあり、その前を流れていた保倉川の土堤はすっかりコンクリートで改修されている。子供だった頃の様子が次々に思い出され、タイムスリップでもしたような錯覚に陥らされてしまった。車は再び川を渡り、快にある空地の前で止まった。そこには碑のようなものが建てられている。

「あ、そうだ、ここは太平洋戦争の最中に捕虜収容所があった所だ」と直ぐに記憶が蘇ってきた。そして、これは慰霊碑であることが判った。普段の生活では思ひ出すことのない遠い記憶が、恰もテレビの画面を見入っているように次々と脳裏を過ぎて行く。収容所は黒く薄汚い倉庫のような粗末なものだったよう覚えてい

るが、この前を通して『国民学校一年生』という唱歌を歌いながら学校へ通ったのはいつの頃だったろうか。

太平洋戦争が勃発し、次第に敗色が濃くなって行くにも拘らず、国威発祥の気運は高まる一方であった。報道機関は大営発表と称し、事実と反するいい加減な報道をし、学校へ行けば先生が黒板に「神風」とか「大東亜栄圈」「鬼畜米英」「欲しがりません勝までは」等といった字を黒板に書き、一層の闘争心を煽り立てるといった状態であった。

雪の降る朝、工場の近くにあった自宅から学校に行く途中、そこで強制労働を強いられるべく外国人兵士の捕虜が、日本軍の憲兵に連行されて行く列に度々出会った。そして、収容所で死んだ兵士の死体には汚い毛布のようなものが被せられ、担架で工場に運ばれて行く光景を度々目にした。何で死体が工場に運ばれて行くのだろうか。子供心ながら不思議に思えてならなかった。

戦争の怖さは何となく、解かつてはいたが、幼少の頃から軍国教育に洗脳され尽くしてしまった子供心には、空襲で死ぬとか戦死することなど何とも思っていなかった。むしろ潔い死に方とさえ思っていた。このことは偽らざる告白である。

遠くの河口が見える。さほど改修された様子はなかったが、いつの頃から佐渡への航路が開設されたようだった。この辺りは以前どうだったんだろうか。記憶にない。二人はまた車に乗り、二つの橋を渡り、意外に短時間で学校に戻った。

日帰りにすることに決め、人影の少ない駅の広場まで送ってもらい、中井さんと別れた。帰りも同じ経路にすることとし、切符を買って階段を降り、ホームで列車の到着を待った。

かつては愛わり者呼ばわりされ、珍奇な野郎と陰口を叩かれ、再度この地の駅のホームに降りることはないと思っていた所に、今一人で立っている。この事が何故か不思議でならなかった。哀傷にも似た心境に陥ってしまったのは何故だろうか。中途半端に通り過したあの頃の改心が今でも心の片隅にあり、そうさせるのだろうか。平素は振り返ることのない記憶が少しずつ戻り、妙な感慨を伴って脳裡に浮遊し旋回する。そして、いつの間にかこの思いが微かな吐息に変わることになったしまった。私だけの静かな時間でもあった。

やがて列車はホームに入ってきて静かに止まった。窓際に席を取るべく急いで乗り、暫くはぼんやりとホームの周辺を眺めていた。この地を離れておおよそ五

十年近い年月が、つい二十年程前のことのように思われてならない。お構いなく過ぎ去っていく時間と押しもどすことのない時間との狭間で、そして何時も乗り遅れ引き摺られて行かなければならなかった過去との狭間で、ただ何となく年月を重ねてしまったことの感慨が交錯する。やがて列車は静かにホームを離れて行った。

窓から見える夕方近くの風景には、かつての残像と折り重なるものは殆んどなく、やや秋色を帯びた前景が、次々と一目散に横切って行く様だけが目を素通りして行った。そうだ、過去の厭な思い出は全部鎖で縛り、海の底に沈めて行くことしよう。そうすれば、再度この地を訪れる時にはなんの嫌りもない懐かしさだけに浸かっていることができるだろう。そう思った途端、何故かほっとした気持ちに立ち返ることができた。

予定通り分岐点「駅後湯沢」で乗り換え、車内販売で烏龍茶の缶を一つ買った。座席に体を倒し少しずつ飲みながら取り留めない様々なことを思ってみた。

どんな歌詞になるのかな…。風土、環境を入れろということだが…。日本海や妙高山は入るだろうが、米山はどうかなあ…。曲調はどうしようかなあ…。歌詞を読んでみないと決められないしなあ…。

それにしても今年（平成十八年）の巨人は弱いなあ…。いい駒もっているのに。采配かな…。思わず今朝持つて来た新聞の面に目が行ってしまふ。また来年も夜の楽しみが減ってしまうなあ…。アメリカの大リーグが面白くなりそうだなあ…。中継は午前中が多いのであまり見られないし…。

つい数時間程前に見た街の風景が、次々と目に映り消えて行く。一体この街にとつて、今でも変らないものと言ったら何なんだろうか。保倉川と荒川の濁った水質、やや淀んだ濃い青磁色の日本海、冬そこから吹き上げる強風、妙高連山に棚引く雲の様相、そして、校長先生からお土産に頂いた継続だんこの品のある清楚な甘さ、だけなんだろうか。これ意外に何かあるだろうか。咄嗟に思い出せない。春日山城跡かなあ…。

車内に響く微かな車輪の音と交錯し、暫くは微睡の時を過すうちに、新幹線列車は大宮へ向かって加速して行った。

（平成十九年七月三十一日 記）